

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：33925

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780271

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラムの発現率増加過程に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Historical Sociology on Increasing Prevalence Rate of Autism Spectrum Disorders

研究代表者

竹内 慶至 (TAKEUCHI, NORIYUKI)

名古屋外国語大学・現代国際学部・准教授

研究者番号：80599390

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自閉症スペクトラム障害が、なぜここ数十年の間に増加したのか、あるいはなぜここ数十年の間に増加したと言われるのか、という論点を解明するために行われた。調査及び資料収集とその検討として、新聞メディアにおける自閉症・発達障害言説の検討、自閉症当事者等が執筆した書籍の検討、自閉症・発達障害に関わる現場で実務を担ってきた人々に対する聞き取り調査を実施し、自閉症(言説)増加に関する社会的要因仮説の検討を行った。

研究成果の概要(英文)：We have been investigating why Autism Spectrum Disorders (ASD) have increased during the last few decades or why discourses of ASD have increased. As the research and collecting data, we considered the discourse of ASD in the newspapers, reviewed the books written by people with ASD, and interviewed people who work in settings related to ASD. As a conclusion, we made a sociological hypothesis about increase of (the discourse of) ASD.

研究分野：社会学

キーワード：自閉症スペクトラム 発達障害 歴史社会学

1. 研究開始当初の背景

先進諸国において、ASD、ADHD(注意欠陥多動性障害)、LD(学習障害)をはじめとする、いわゆる発達障害が社会問題化しつつある。このような問題に対して、脳科学や精神医学、心理学などの領域では熾烈な研究競争が巻き起こり、毎日のように関連遺伝子や自閉症発現率の報告、心理療法の効果などに関する研究成果が報告されている。そのような状況に対し、近年では、アイデンティティや社会意識といった社会的論点、子どもの権利やプライバシー、治療的介入といった法的論点、疾患・障害へのラベリングとスティグマのような倫理的論点、その他、研究で得られたデータの所有権や根拠にもとづいた介入や市民参加などの諸問題(いわゆる ELSI: Ethical Legal Social Issues)へと問題領域が拡大していることが指摘されている(Singh and Rose:2009)。

社会学の領域においても、ASD 家族とスティグマの問題(Gray:1989, 1993, 1997, 2001)や療育場面における相互行為過程(鶴田:2008, 水川・中村・浦野:2013)などの研究が存在するが、問題の深刻さと広範さに比して研究の展開は限定的なものにとどまっている。

そのような状況の中、研究代表者らは、ASD に対する社会認識の調査を行い、ASD に対する一般市民の意識を明らかにしてきた(竹内:2012, 溝部・竹内編:2013)。また、ASD の問題は医学的・福祉的・教育的な問題であると同時に、極めて社会的な現象であることを論じてきた(竹内編 2013)。ASD の中心的な症状は「社会性の障害」と「想像力の障害とそれにもとづく行動障害」の二つであり、対面相互作用場面における「障害」をその特徴としている。つまり、このことは、ASD という障害は相互作用という極めて社会的文脈の影響を受けやすい障害であることを示唆している。別の言い方をすると、社会的な場面・領域における何らかのトラブルが ASD としてラベリングされているとも言えよう。

ASD をめぐる問題には様々なものがあるが、その中でも特に重要な課題のひとつが、「ASD がなぜここ数十年の間に増加したのか」という論点である。本研究ではこの問題を中心課題に据え、歴史社会学的アプローチでもって迫る。

2. 研究の目的

本研究では、ループ効果概念を基本的視座として採用したうえで、ASD 発現率上昇問題の社会的要因の解明に取り組む。ASD 発現率に関する社会的要因を検討するために、本研究では以下の3つの具体的な課題を設定し、調査研究および分析にあたる。

第一の課題は、日本における ASD の歴史的展開に諸アクターが果たした役割を明らかにすることである。ASD 周辺領域には様々

なアクターが存在するが、本研究で特に焦点を当てるのは、(1) ASD 当事者とその家族、および当事者(家族)団体(2)精神科・小児科の医師および療育実践家、(3) ASD 領域に関連する厚生労働省・文部科学省の担当官(元)以上の3領域のアクターである。第1課題では、これらのアクターが ASD を取り巻く社会状況の構成にどのように関わってきたのかということをも明らかにする。

第二の課題は、1950年代以降、現在に至るまでの自閉症に関する言説分析を行い、日本における ASD 言説の変遷について明らかにすることである。特に精神科医や小児科医、療育実践家や心理療法家などが執筆した論文や雑誌記事、書籍などを収集し、分析を行う。それと同時に、新聞紙上における ASD 概念の用法や拡がりについても検討を加える。小澤(2007)が明らかにしているように、ASD 概念はこれまでいくつかの大きな変遷を経てきている。本研究でもそれをふまえて、特に自閉症論の一大転機となった1960年代から1970年代ごろの言説を中心に言説分析を行う。なお、本研究では、第1課題と第2課題を接続するものとして「ループ効果」概念を採用しており、第1課題と第2課題はそれぞれ個別に探求されるものでありつつ、かつ、その両者の相互作用を念頭に置きつつ分析を行うこととする。

第三の課題は、日本における ASD の拡大や変遷、ASD を取り巻く各アクターの関連の分析を行ったうえで、国際比較研究へとつなげることである。これにより、ASD 増加という先進諸国に共通した問題のどのような点が各国固有の問題で、どのような点が先進諸国共通の普遍的な現象なのかということをも明らかにする。ASD の発現率上昇は先進諸国において共通する事態であるが、完全に同じ様な軌跡を描いているわけではない。各国の状況を比較することによって、社会の在り方あるいは文化歴史的な影響を考慮したうえでの分析が可能となる。最終的には米国・仏国・日本・トルコの比較研究までが射程に入っているが、本研究では日本と米国との比較研究に焦点を絞って研究を進める。さらに、ASD の拡大という事態は、どこまでが生物医学的な問題でどこからが社会的影響なのかという点についても考察を進める。

3. 研究の方法

本研究は、日本における ASD 増加に関する社会的要因の解明のために、以下の3つの課題を設定して調査研究に取り組む。

課題1: 聞き取り調査の実施: ASD を取り巻く諸アクターの中から、特に(1)当事者・当事者家族を中心とする当事者団体、(2)精神科医・精神医学研究者、療育実践家、(3)官公庁担当官、に対して聞き取り調査を行ない、各アクターが ASD の展開過程において果たした役割を明確化する。

課題2: ASD 周辺領域における諸実践を支

える諸言説に関する言説分析を行う。特に、精神医学・心理学等論文・文献資料、新聞資料等の分析を行って、ASD 概念の展開過程について考究する。

課第 3：課題 1、課題 2 を通して得られた日本における ASD を取り巻く諸実践の様相を米国を中心とする国際比較研究へと接続することによって、ASD と社会の関連を解明する。

4. 研究成果

(1) メディア言説の分析

新聞紙上における、1984 年から 2014 年までの約 30 年間の自閉症言説および発達障害言説を計量的、質的に検討した。

その結果、発達障害言説よりも自閉症言説の方が先行して増加していること、自閉症言説の増加は自閉症当事者本登場と軌を一にしていることが明らかとなった。

また、1980 年代から 2000 年代前半の発達障害言説は 2004 年代以降の〈発達障害〉言説とは質的に異なっていることが確認された。具体的に述べると、1980 年代から 2000 年代前半の発達障害言説は、知的障害、精神薄弱などをひとまとまりとして扱うための言葉として使用されているのに対し、2004 年以降は発達障害者支援法において述べられている〈発達障害〉の定義に従ったものとなっている。

なお、本研究成果は科学社会学会第 4 回年次大会において報告を行った。

(2) 自閉症当事者本の検討

日本では、1988 年に山岸裕・石井哲夫によって『自閉症克服の記録』が刊行されたのを嚆矢に、その後 1990 年代には世界的に有名な自閉症者であるドナ・ウィリアムズおよびテンプル・グランディンの著書が翻訳された。2000 年代以降は毎年のように当事者本が刊行されている。

当初は自閉症者と医者とのペアによる刊行、自閉症者の経験の描写などが中心であったが、2000 年代後半から 2010 年代になると当事者研究や研究者であり当事者である者が執筆した書籍などが刊行されるなど、自閉症言説の布置に変化が見られた。

(3) 聞き取り調査の実施

現在のようなかたちで自閉症が話題になる以前から自閉症関連施設や学校等で勤務していた人々に聞き取り調査を実施した。また、当事者団体で活動を担ってきた方々にも聞き取り調査を行った。

自閉症当事者・家族団体とその他の障害当事者・家族団体との相互作用、「インクルーシブ教育」と言われるものの日本における始まりとその頃の社会状況について知見を得ることができた。

なお、(1)～(3)までの研究成果の一

部は 2017 年度刊行予定の自閉症論集（生活書院）に盛り込まれる予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

竹内慶至・田邊浩・松田洋介「スウェーデンにおける発達障害の人びとのための社会的支援：マルモ調査報告」子どものこころと脳の発達、2016、55-60 頁、査読有

竹内慶至「今月の書評『ユーモアとしての教育論』」月刊高校教育 2016 年 7 月号、2016、94 頁

Toshio Munesue, Hiroyuki Nakamura, Mitsuru Kikuchi, Yui Miura, Noriyuki Takeuchi, Tokie Anne, Eiji Nanba, Kaori Adachi, Kiyotaka Tsubouchi, Yoshimichi Sai, Ken-ichi Miyamoto, Shin-ichi Horike, Shigeru Yokoyama, Hideo Nakatani, Yo Niida, Hirota Kosaka, Yoshio Minabe and Haruhiro Higashida “Oxytocin for Male Subjects with Autism Spectrum Disorder and Comorbid Intellectual Disabilities: A Randomized Pilot Study” *Frontiers in Psychiatry* 7-2, 2016, 査読有

竹内慶至「書評 木村祐子著『発達障害支援の社会学-医療化と実践家の解釈』保健医療社会学論集第 26 巻 2 号、2016、91-92 頁

竹内慶至「今月の書評『<子どもという自然>と出会う』」月刊高校教育 2015 年 4 月号、2015、94 頁

竹内慶至「今月の書評『現代日本の「社会のこころ』』」月刊高校教育 2014 年 10 月号、2014、94 頁

竹内慶至「今月の書評『「つながり格差」が学力格差を生む』」月刊高校教育 2014 年 7 月号 2014、94 頁

〔学会発表〕(計 2 件)

竹内慶至「学校・学級を「ひらく」-自閉スペクトラム症と秩序-」豊中市小学校校内研修講師、2016

竹内慶至「日本における『自閉症』現象の構築と展開」科学社会学会第 4 回年次大会(於東京大学)、2015

〔図書〕(計 1 件)

竹内慶至・溝部明男編『自閉症スペクトラムの子どもの子育てに関する質的研究-2014 年度自閉症の子どもの子育て調査』金沢大学社会学研究室、2016、計 314 頁

6 . 研究組織

(1)研究代表者

竹内慶至 (TAKEUCHI Noriyuki)

名古屋外国語大学・現代国際学部・准教授

研究者番号：80599390